

〔研究ノート〕

近現代経済学形成に占めるオーストリア学派の役割と意義  
: F.v.Wieser Bibliothek再整理作業から

桂 木 健 次

富山大学紀要. 富大経済論集 第58巻第2・3合併号抜刷 (2013年3月)

富山大学経済学部

〔研究ノート〕

## 近現代経済学形成に占めるオーストリア学派の役割と意義 ：F.v.Wieser Bibliothek 再整理作業から

桂 木 健 次

キーワード：ヴィーザー文庫，ミーゼス，ハイエク，シュンペーター，貨幣，自由，市場，国家

### 1. 現在課題の貨幣的景気循環論へのつながり

前承，下記に再掲する表（『富大経済論集』58（1），p.143表4部分）にみるように旧制官立高岡高等商業学校収蔵のヴィーザー文庫に分類されていた文献は，「国民経済Nationalökonomie」，「貨幣Geld・信用Kredit」から「統計Statistik」にわたる社会科学23分野に及ぶ1,592冊である。本稿では，うち銀行信用論の分野の文献との照合を，ヴィーザー Wieser, Friedrich vonを受け継いだミーゼス Mises, Ludwig vonとハイエク Hayek, Friedrich vonにみられるオーストリア経済学の自由論と市場・貨幣経済社会の研究に限定して考察する。

分 類	文献番号	件数	冊数	備 考
I Nationalökonomie	1-64	64	70	No.60は7冊
II Kapital,Zins	65-89	25	25	
III Konsum,Produktion	90-109	20	20	
IV Krisen	110-127	18	18	
V Lohn,Einkommen	128-153	26	26	
VI Monographie	154-205	52	52	
VII Rente	206-222	17	18	No.217は2冊
VIII Wert,Preis	223-332	110	114	No.242は5冊
IX Bank,Börse	333-432	100	100	
X Geld,Kredit	433-630	198	202	No.534は3冊，548,575は2冊
XI Sparwesen	631-650	20	20	
XII Finanzwissenschaft	651-840	190	193	No.723,821,830は2冊
XIII Gewerbe,Industrie,[Handel]	841-935	95	98	No.850,896,923は2冊，899は不明
XIV Wucher	936-944	9	9	
XV Agrarwesen	945-1042	98	103	No.968,1037は3冊，1034は2冊
XVI Sozialwissenschaft	1043-1217	175	183	No.1070,1074,1081は2冊，1153は4冊，1184は3冊
XVII Soziologie	1218-1259	42	42	
XVIII Armenwesen	1260-1284	25	25	
XIX Bevölkerungswesen	1285-1320	36	36	
XX Frauenfrage	1321-1348	28	28	
XXI Wohnungswesen	1349-1399	51	53	No.1372は3冊
XXII Statistik	1400-1483	84	84	No.1401は不明
XXIII Politik	1484-1554	71	73	No.1495,1545は2冊
		1,554	1,592	

オーストリア経済学は、ミーゼスの1911年の言葉を借りれば、「40年前にメンガー Mengar, Carlの出現とともに始まった国民経済学の変革は、貨幣理論にも痕跡をとどめることなくは通り過ぎなかった。メンガー自身、近代的貨幣理論の基礎を作り、ついでヴィーザーはその基礎の上に立って主観的価値論を貨幣価値論に役立たせた。まだ解決されずにある貨幣理論上の問題を究めんとする如何なる試みも、今日メンガーおよびヴィーザーの研究から出発せねばならない。」彼の景気循環論と貨幣理論の最も早い書 *Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel* (1912) への序文である<sup>1)</sup>。

ミーゼスは、彼の理論的営為が、その後のバウム＝バヴェルク Böhm-Bawerk, Eugen vonの資本利子論<sup>2)</sup> ならびにヴィクセル Wicksell, Johan Gustaf Knut銀行論<sup>3)</sup> を踏まえてなされたことを同書2版(1924)で断って、貨幣は歴史的ならず論理的にも「商品市場の外部から」動機づけられねばならず、その「貨幣的使用以外のある源から発する価値が貨幣使用の本質的な前提」としたとしても、その「経済制度のうちで独立的に経済し、評価する主体」は、しかし「国家でなく、市場で交換する者の総体」が貨幣を創造するので、信用貨幣のもとであっても「財貨に一般的弁済能力を付与する国家の命令を以って貨幣となすことは出来ない」という。その考察に当たって、ミーゼスはニューヨークのアンダーソン Anderson, Benjamin M.との議論を踏まえている。

そのアンダーソンからの寄贈文献が3点、文庫でも確認できる。

No.0130 The income of the American people and the ratio of foreign to domestic trade 1890-1924. Reprinted from *The Annalist*. New York, 1925.

No.0224 Factors of safety when prices drop, *The Chase Economic bulletin*, Vol.1, No.2 New York, 1920.

No.0945 Agriculture and dairying in the world's economic equilibrium: An interpretation of some agricultural statistics, *The Chase Economic bulletin*, Vol.3, No.4, New York, 1923.

ヴィーザーは主著『自然価値論 *Der Naturliche Werth*』（1880）の序文で以下のように言っている。

「価値理論において取り扱われるものは、価値の大いさを支配する法則の表現だけではない。価値が経済生活においてどう役だっているかが分析されなければならない。すなわち、価値とその他の無数の経済現象との関係である。

我々の理論の直接の先駆者と言いうるのは、アウグスト・ワルラス *Walras, Auguste*『富の性質と価値の概念 (*De la nature de la richesse et de l'origine de la valeur*, Evreux, 1831)』,そして互いに固有の理論を仕上げた四人の学者、ゴッセン *Gossen, Hermann Heinrich*, ジェボンス *Jevons, William Stanley*, メンガー,そしてレオン・ワルラス *Walras, Léon*。・・・メンガーはより一般的な価値概念から出発しているため、対象をもっと深く突いている。メンガーはこれをドイツの国民経済学派から得ている。ドイツ理論は、将来長きにわたり後のすべての学問上の努力を続けていく事ができる財宝を貯えている。

ジェボンス体系のうち効用理論は、イギリス文献になった。ドイツではそれに従ったラウンハルト *Launhardt, Carl Friedrich Wilhelm* の著がある。しかし特に、オーストリアではメンガーの跡を継いで新しい意味で価値理論の改作が試みられる。私は、メンガー理論を費用現象に適用したものを公刊した。これに続いてベーム＝バヴェルクの著書 (*Gründzuge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerths in den "Jahrbüchern für Nationalökonomie und Statistik"*, N.F.Band XIII, Jena, 1886) も出た。特に重要なのは、客観的価値－価格－を扱ったことである。<sup>4)</sup>」。

師のヴィーザーに及んで、ミーゼスからは以下の指摘が前掲書でなされている。

「ヴィーザーは貨幣の購買力の史的関連を発見することで主観的価値理論のその後の進捗の基礎を作ったが、いかに価値が形成されるかをなんら述べていない。<sup>5)</sup>」。

ミーゼスは「限界効用の概念は個々の商品相互の間にある交換比率の説明には適しているが、貨幣とそのほかの経済財の間の交換比率の説明に意味をなさない。その市場過程では規定されない」、そしてこのことを我々に指し示したのがヴィクセルであったのだと、以下を指摘した。「貨幣はその貨幣機能開始の瞬間に既に、貨幣機能ではなくして他の要因に帰すべき客観的交換価値をもっていなければならない、一般的な交換手段としての機能に基づく。<sup>6)</sup>」

主観主義の観点から捉えられる貨幣が如何にして客観的な価値秩序と結びつくのかについてのミーゼスによる貨幣の説明は、マルクスが"Das Kapital"1-1で貨幣商品を一般的等価物としての説明を行った際にもこれを**一般的直接的交換可能性の形態を持っている「一般的等価物」なる一商品（貨幣）**にも似て、主観的価値がアプリアリなカテゴリー逆転として必然的に客観的価値形態をもつ「主観的使用価値から客観的交換価値を経て貨幣が成立する」ということを意味しているとすることができる。ミーゼスは「貨幣とそのほかの商品群」との関係その「貨幣的使用以外のある源から発する価値が貨幣的使用の本質的な前提」として、「商品市場の外部から」動機づけられると定義しているのである。

ヴィーザーが死去したときに追悼文を寄せた三人が知られている。シュンペーター Schumpeter, Joseph, ハイエク並びにヴィーザー退職後に教授職に就いていたハンス・メイヤー Meyer, H. Friedrichである<sup>7)</sup>。うち、シュンペーターとハイエクはそれぞれ、ウィーン大学とその地で学んだオーストリア学派の持ち味を活かしながら、ケインズ経済学並びに新古典派経済学の時代を通して、限界概念をマクロにおける価値（価格）均衡の政策課題に応用していく<sup>8)</sup>。とりわけ、ハイエクはヴィーザー門下の兄弟子であったミーゼスとの商務省執務および彼が私的に主宰していたゼミを通しての深い継がりから、後年のノーベル賞受賞へとつながる（均衡若しくは不均衡）景気における貨幣（通貨）利子率の問題という動学的考察へと道を開いた。<sup>9)</sup>

ヴィーザー文庫に収蔵されているシュンペーター、ミーゼス及びハイエクか

らの寄贈文献は以下のものがある。ここでは、それぞれの業績の流れを整理しておく。

**Schumpeter, Joseph** (1883.2.8-1950.1.8)

No.0048 Die Wellenbewegung des Wirtschaftslebens, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.39, Heft1, Tübingen, 1914. 併設: 一橋古典 Mengar

No.0080 Eine "dynamische" Theorie des Kapitalzinses, Sonderabdruck aus der *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, Wien, 1908.

No.0166 Eugen von Böhm-Bawerk, *Neue Österreichische Biographie* 1. Abt., 2. Bd.: 63-80, Wien, 1925. 併設: 一橋古典 Mengar ほか

No.0196 Epochen der Dogmen und Methoden Geschichte, *Grundriss der Sozialökonomik*, Separatabdruck aus Abtl.1, Tübingen, 1914. 併設: 一橋古典 Mengar ほか

No.0217 Das Rentenprinzip in der Verteilungslehre, Sondeabzug aus *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im deutschen Reiche*, Leipzig, 1907. 併設: 一橋古典 Mengar ほか

No.0589 Kreditkontrolle, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Separatabdruck aus Bd.54, Heft 2, Tübingen, 1925.

No.0706 Grundlinien der Finanzpolitik für jetzt und die nächsten drei Jahre, Wien, 1919.

シュンペーターが信用供与における本質的規定を明示的に出したのは1912年であるが、それは、「信用は経済発展に役立つ限りの国民経済における典型的債務者である企業が生産を行い、新結合（後年の定義で言うイノベーション）を遂行するために必要とする購買力」のためのものである。そしてその購買力は、①「先行経済期間の生産物の売上げ金から企業者に対して自動的に与えられる経常的な信用のもの」ではなく、また②「消費信用の類」のものでもなく、①も②も経済発展の「付随現象」なのであると言うところとするのは、上記の初期文献にも既にその視点の萌芽を認めるところである<sup>10)</sup>。

「信用の唯一の、かつ本質的な機能は、信用の供与によって、企業家は必要とする生産手段に対する需要を展開することによって、経済を強制的に新しい軌道に乗せることが出来る。その信用は特別に創造された信用支払手段からのみ成り立ちうる。この信用とは、現在の財の流れに対する参加証（既存の生産物の証明証）ではなく、いわば「将来財への証明書」の発行であり、信用供与が本質的な機能を果たす場合」である。

従って、信用とは本質的には企業者に譲渡する目的でなされる「購買力の創造」であって、単に既存の購買力（既存の生産物に対する証明書）を譲渡することではない。この意味での信用供与とは、「経済を企業者の目的に服従させる命令、彼が必要とする財貨に対する指図、彼に対する生産力の委託」という働きをもつ。<sup>11)</sup>」

Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, Leipzig, 1908.

Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, Leipzig, 1912.

“Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte”. *Gründriss der Sozialökonomik*, I. Abteilung, *Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft*, Tübingen, 1914.

この時期のシュンペーターは、ベーム＝バヴェルクからさらに歩をすすめてワルラスの均衡論を止揚して、1919年の短期ながらの蔵相就任ならびに民間銀行頭取としての破産を経験し、オーストリア学派の親近スピートホフ Spiethoff, Arthur からのボン大学への招聘をうけて赴任、東畑精一を指導していた時期にあたる。『発展』の訳者の言によると、企業者の創造的活動を中心として理解される「生産要素を慣行の軌道から引き離し新しい用途に転用する新結合」を遂行するに必要な供給する「信用」という一連の現象こそ、「ワルラス的につかまれた均衡的静態過程」の攪乱として<sup>12)</sup>、現実の市場では創造的破壊を通じた動学的な競争がキーワードをなすということになる。このように、シュンペーターはあくまでも資本主義経済の「循環的成長」のメカニズムを説明するのであって、企業者による新結合を通じた創造的破壊がその主たる

動因であるとおき、それに信用創造を行う機能を有する銀行並びに貯蓄を供与（投資）する資本家のかかわりを説明することになる。平井は、こうしたシュンペーターはある意味で「資本主義社会の崩壊」を説明するために理論営為しているのではないのか、と言う<sup>13)</sup>。確かに彼は書いている。

「資本主義経済においては、果てしない運動と反運動が必要であり、しかもそれは不確実な雰囲気の中で決定をなさねばならない。」(Capitalism, Socialism and Democracy, pp.307-8)

“Edgeworth und die neuere Wirtschaftstheorie”. *Wirtschaftliches Archiv*, Bd.22, 1925.

“Kreditkontrolle. *Arhiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.54, 1925. 文庫 No.0589

“Cassels Theoretische Sozialökonomik”. *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, Jg.51, 1927.

“Zur Frage der Grenzproduktivität”. *ibid.*

“Zur Einführung der folgenden Arbeit Knut Wicksells”. *Arhiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.58, 1927.

“The Instability of Capitalism”. *Economic Journal*, Vol.38, 1928.

“Mitchel’s Business Cycles”. *Quarterly Journal of Economocs*, Vol.45, 1930.

“Das Kapital im wirtschaftlichen Kreislauf und in der wirtschaftlichen Entwicklung”. *Kapital und kapitalismus*, Vorlesungen gehalten in der Deutschen Vereinigung für Staatswissenschaftliche Fortbildung, Bd.1, Hrsg. von Bernhard Harms, Berlin, 1931.

*Business Cycles: A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Progress*, New York & London, 2 vols, 1938.

シュンペーターは、こうした不確実な競争的状況下での企業者の新結合として市場を捉えている。以下に触れるミーゼスやハイエクといった流れでは—もちろん両者にはニュアンスが異なるのであるが—例えばハイエクで捉まれる



「自生的秩序」としての価格システムがある種の情報（知識）伝播の役割を果たすのと比して、シュンペーターの場合には比較体制としてのロシアに出現した社会主義社会との照合があった。後述にふれるミーゼスでいう「中央当局による計画経済では合理的経済活動を行なうこと能わない」としたのであるが、シュンペーターでは「中央当局に委ねられる生産手段に対する支配若しくは生産自体に対する支配」は資本主義過程として必然とすると言う意味でマルクスおよびロシアにおけるレーニンの実験に近似的でさえある。

このシュンペーターにおいては、同じオーストリア経済学の出自でありながら、中央当局の配下におかれる生産手段の価格決定・保有・配分並びに社会構成員に配分される指図証券（1年限り）によって、ワルラス的静態的な、そして生産能率的にも優れた社会が社会主義経済であるというパラドックスが成り立つ<sup>14)</sup>。

Capitalism, Socialism and Democracy, New York, 1942.

“The March into Socialism”. *American Economic Review*, Vol.40, 1950.

### **Mises, Ludwig.v** (1881.9.29 - 1973.10.10)

No.0549 Das Problem gesetzlicher Aufnahme der Borzahlungen in Österreich-Hungarn, Sonderabzug aus *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reiche*, Leipzig, 1909.

No.0287 Die allgemeine Teuerung im Lichte der theoretischen Nationalökonomie, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Separat-Abdruck aus Bd.37, Heft 2, Tübingen, 1913.

No.0550 Der Wiedereintritt Deutsch-Österreichs in das Deutsche Reich und die Währungsfrage. [*Wirtschaftliche Verhältnisse in Deutsch-Österreich: Schriften des Vereins für Sozialpolitik*, 158, 1919, Wien].

No.1127 Zur Geschichte der österreichischen Fabrikgesetzgebung, Sonderabdruck aus der *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, Bd.14, Wien

und Leipzig, 1905. 併設: 東大河合

No.1128 Die Wirtschaftsrechnung im sozialistischen Gemeinwesen, Separatabdruck aus *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.47, Heft 1, Tübingen, 1920.

ミーゼスの主要著作は以下の通りで、うち、No.1128（論文『社会主義共同体における経済計算』）は、「社会主義経済計算論争」として早、ロシア革命直後の1920年にミーゼスが提起した争点の一つである。なお、彼が提出した争点は、この経済計算論争などで計画経済への批判のほか、彼をウィーンから追い出したファシズムを左翼に分類したことで知られるが、オーストリア学派として貨幣的景気理論を展開した業績には後述するとおりおおきなものがある。

前出第1点の論文の序論においてミーゼスは次のように語った。

「多くの社会主義者にして全然経済の問題を理解せず、人間社会の特質を決定すべき条件についての何らかの明確な概念を自ら構成しようとする試みを全くなそうともしない者がいる」。

ミーゼスは、資本主義を批判する社会主義者が社会主義そのものについては原理的な主張しかせず、実際の社会主義経済運営の在り方と実務についての欠落を指摘をした。この批判は70年後に現実のものとなり、社会主義ソ連邦は政治的分割統治としての分業に基づく軍需と巨大工業体制とは裏腹に、生活必需品など消費財の供給における経済的非効率の破綻のなかで歴史を閉じた。

その指摘のポイントは、現前しているソヴィエト連邦共和国の社会主義共同体における経済運営では経済計算は不可能で、中央当局による計画経済で合理的経済活動を行なうことが能わない限り破綻する以外ないとした点にあるが、その伏線にあるのは1919年同じオーストリア学派出自のドイツのバイエルン・レーテ共和国中央計画局長官オットー・ノイラート Neurath, Ottoが「価値」や「貨幣」を廃する実物経済の可能性を主張した著書『戦争経済から実物経済へ Through war economy to economy in kind』（1919）への争点であり、実際に革命ロシアにおいて戦時経済体制のもとで一時的に貨幣が排されて配給が主

要形態になっていて、ミーゼスはこうした経済は持続不可能とした。ここでのミーゼスの論議の核心は、

「すべての企業は相互に関連し合っている。あらゆる財はそれが消費財に完成するまでにこの全段階を通らなければならない。しかしこの過程の休みなき遂行において、経済管理当局はそれらの諸関連を検証すべき何らの手段方法をもたない。一定の財貨が必要な生産過程に不必要に長い時間置かれていなかったかどうか、またはその完成過程に労働と資材が浪費されなかったかを当局は確かめることはできないであろう。最も安価な方法を発見するための計算は当然、価値計算でなければならない。それは技術的性質のものではあり得なく、それが財貨とサービスとの客観的使用価値で基礎づけられえないことは、極めて明白であり、証明を要しない。<sup>15)</sup>」

つまりミーゼスは、「最終生産物の質と量だけでは合理的経済活動を検証することにはならず、中間過程を含む全ての生産財、原料、労働力などの価値を折り込み、関連づけた総合的な経済評価がなされなければならない」と指摘した。そして、この複雑な評価が可能な場所は、貨幣経済を通じてすべての生産手段や原料、労働力が不断に価値評価されている市場に他ならないとし、「生産手段の私有および貨幣の使用からわれわれが一步離れることは同時に合理的経済から離れることである」と断じ、自らの貨幣的景気理論の展開と向き合うことになった。

景気循環は市場の内在的要因からではなく中央銀行の信用拡大が原因であると説明する論旨、並びに市場に登場する経済主体は絶えず新たな知識（価格情報）や意味付けを分有しあう行為者であって、新古典派の定理のように予め予定調和的・予算制約を前提とする選択反応ではないとするのは、むしろミーゼスにより積極的に展開された理論である。ここでは本論の文脈上、1924年版から「貨幣と国家」並びに「貨幣価値政策」についての考を取り出すに留める。

物品貨幣から信用貨幣への移行の際のドイツ貨幣制度の検討から、ミーゼス

は「国家が造幣権主」としておこなった干渉を取り上げている。

1914年以前のドイツでもイギリスでも、貨幣であったのは金ではなくマルクかポンドであった。貨幣と言うのは、価値尺度として機能する価値単位と看做される表象に対する呼称である<sup>16)</sup>。

ミーゼスにとって、物品貨幣制度を固執するという持論を展開するのは、「それによって国家の影響から貨幣価値の独立が保証される」という所以である。彼は国家が貨幣価値に干渉することを、インフレーションの面から強く警戒していた。「国家が干渉しても差し支えなくまた干渉すべきという展開が認められると、例えそれが内的安定を保証するがためであるにしても、必ずやまた過失と過度の危険が現れる」からだ。もちろん、彼は次のように断りも入れている。

「貨幣価値政策上の干渉の実行を断念することは、それは結局、金属的物品貨幣本位を堅持することであるが、完全なものではない。流通手段の発行を調節する可能性によって貨幣の内的客観的交換価値に干渉するもう一つの手段が得られなければならない。<sup>17)</sup>」

“Die Entwicklung des gutsherrlich-bäuerlichen Verhältnisses in Galizien (1772-1848)”. *Wiener Staatswissenschaftliche Studien* 4 (2), Wien & Leipzig: Franz & Deutche, 1902.

*Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel*. München & Leipzig: Duncker & Humblot, 1912. 2 Aufl. 1924. *The Theory of Money and Credit*. 1934. New ed. New Haven: Yale University Press, 1953. (新たに“Monetary Reconstruction”の章を含む) 東米雄訳『貨幣及び流通手段の理論』実業之日本社, 1949. 日本経済評論社, 1980. 2004 (オンデマンド版).

*Nation, Staat und Wirtschaft: Beiträge zur Politik und Geschichte der Zeit*. Wien & Manz, 1919.

“Die Wirtschaftsrechnung im sozialistischen Gemeinwesen”. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 47, 1920. Economic Calculation in the socialist Commonwealth. Auburn, Ala.: Ludwig von Mises Institute, Auburn University, 1990.

Die Gemeinwirtschaft: Untersuchungen über den Sozialismus. Jena: Fischer, 1922. 2 Aufl. 1932. Socialism. London: J. Cape, 1936. New ed. New Haven: Yale University Press, 1951.

Die geldtheoretische Seite des Stabilisierungsproblems. München & Leipzig: Duncker & Humblot, 1923.

Liberalismus. Jena: Fischer, 1927. The Free and Prosperous Commonwealth. Princeton, N.J.: Van Nostrand, 1962.

Geldwertstabilisierung und Konjunkturpolitik. Jena: Fischer, 1928.

Kritik des Interventionismus: Untersuchungen zur Wirtschaftspolitik und Wirtschaftsideologie der Gegenwart. Jena: Fischer, 1929.

Die Ursachen der Wirtschaftskrise: Ein Vortrag, Tübingen: Mohr, 1931.

Grundprobleme der Nationalökonomie. Jena: Fischer, 1933. Epistemological Problems of Economics. Princeton, N.J.: Van Nostrand, 1960.

Nationalökonomie: Theorie des Handelns und Wirtschaftens. Geneva: Edition Union, 1940.

Omnipotent Government: The Rise of the Total State and Total War. New Haven: Yale University Press, 1944.

Planned Chaos. Irvington-on-Hudson, N.Y.: Foundation for Economic Education, 1947. (Socialism. 1951のエピローグとして掲載)

Human Action: A Treatise on Economic. New Haven: Yale University Press, 1949. New rev. ed. 1963. 3rd rev. ed. Chicago: Regenery, 1966. 村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社, 1991.

Planning for Freedom: And Other Essays and Addresses. South Holland, Ill:

Libertarian Press, 1952.

The Anti-Capitalistic Mentality. Princeton, N.J.: Van Nostrand, 1956.

Theory and History. New Haven: Yale University Press, 1957.

The Ultimate Foundation of Economic Science. Princeton, N.J.: Van Nostrand, 1962. 村田稔雄訳『経済科学の根底』日本経済評論社, 2002.

Human Action New rev. ed. New Haven: Yale University Press, 1963. 3rd rev. ed. Chicago : Regenery, 1966. 村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社, 1991.

以下3点は、彼の死後に編者により刊行になる。

Notes and Recollections. 1978.

Economic Policy: Thoughts for Today and Tomorrow. South Bend, Ind.: Regnery/Gateway, 1979. 村田稔雄訳『自由への決断: 今日と明日を思索するミーゼスの経済学』広文社, 1980.

Interventionism: An Economic Analysis. Irvington-on-Hudson, N Y.: Foundation for Economic Education, 1998. (Nationalökonomie, 1940. の一部)

### **Hayek, Friedrich von.** (1899.5.8 – 1992.3.23)

No.0713 Die Währungspolitik der Vereinigten Staaten seit der Überwindung der Krise von 1920, *Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik, Sonderrabdruck aus Neue Folge*, Bd.5, Heft 1 Bis 3, *Herausgegeben von Hans Mayer, Richard Reisch, Othmar Spann, Friedrich Wieser*, Wien, 1925.

No.0497 Die Währungspolitik der Vereinigten Staaten seit der Überwindung der Krise von 1920, *Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik, Sonderrabdruck aus Neue Folge*, Bd.5, Heft 4 Bis 6, Wien, 1926.

ビジネスサイクル（景気循環）の原動力を考察するということではオーストリア学派出のシュンペーターとハイエクに出番が与えられた。シュンペーターの渡米（ハーバード大学）とほぼ時期を同じくして、ハイエクには1931年にイギリスのL.S.E.に席を与えられた。ヴィクセルの「累積過程」と大陸

の伝統による多部門過剰投資モデルを使って、貯蓄より大きな投資が可能になっても望む（期待）投資や消費需要が実際の産出で満足されることはなく、そこには「強制貯蓄」が発生し消費需要が与えられない限りは資本財の需要は続かず産出は低下し結果として資本集中度は下がる、とする貨幣・資本・景気循環のオーストリア学派の理論をベースに、資本の再定義の仕事に入った<sup>18)</sup>。

ハイエクの1940年に至る主要著作は以下の通りであり、文庫に収蔵されているのはそれに先立つ上記の2件である。

“The Monetary Policy of the United States After the Recovery from the 1920 Crisis”. *Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik*, 1925. (上記No.0713.)

“Friedrich von Wieser”. *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 1926.

“Das intertemporale Gleichgewichtssystem der Preise und die Bewegungen des ‘Geldwertes’”. *Weltwirtschaftliches Archiv*, 1928. “Intertemporal Price Equilibrium and Movements in the Value of Money”. *Money, Capital and Fluctuations: Early essays*. London: Routledge & K.Paul, 1984.

Geldtheorie und Konjunkturtheorie. Wien & Leipzig: Hölder-Pichler-Tempsky. 1929. Monetary Theory and the Trade Cycle. London: Jonathan Cape, 1933.

“Gibt es einen ‘Widersinn des Sparens?’”. *Zeitschrift für Nationalökonomie*, 1930. “The Paradox of Saving”. *Economica*, 1932.

Prices and Production. London: Routledge, 1931. Preise und Produktion. Wien: Julius Springer, 1931.

“Reflections on the Pure Theory of Money of Mr. J. M. Keynes”. *Economica*, 1931-2.

“A Note on the Development of the Doctrine of Forced Saving”. *Quarterly Journal of Economics*. 1932.

“Der Stand und die nächste Zukunft der Konjunkturforschung”. *Festschrift für Arthur Spiethoff*, 1933. “The Present State and Immediate Prospects of the

Study of Industrial Fluctuations” *Profits, Interest and Investment: And Other Essays on The Theory on Industrial Fluctuations*. London: Routledge & K. Paul, 1939.

“The Trend of Economic Thinking”. *Economica*, 1933.

“Über “neutrals Geld” ” *Zeitschrift für Nationalökonomie*. 1933. “On Neutral Money”. *Money, Capital, and Fluctuations: Early Essays*. Chicago: University of Chicago Press, 1984.

“Carl Menger, 1840-1921”. *Economica*, 1934.

“The Maintenance of Capital”. *Economica*, 1934.

Collectivist Economic Planning: Critical Studies on the Possibilities of Socialism. London: George Routledge & Sons, 1935.

“Preiserwartungen, Monetäre Störungen und Fehlinvestitionen”. *Nationalökonomisk Tidsskrift*. 1935. “Price Expectations, Monetary Disturbances and Malinvestments”. *Profits, Interest and Investment: and Other Essays on The Theory on Industrial Fluctuations*. London: Routledge & K. Paul, 1939.

“Richard Cantillon: His life and work”. *Revue des Sciences Economiques*, 1936.

“Economics and Knowledge”. *Economica*, 1937.

“Investment that Raises the Demand for Capital”. *Review of Economic Statistics*19, 1937.

*Profits, Interest and Investment: And Other Essays on The Theory on Industrial Fluctuations*. London: Routledge & K. Paul, 1939.

“The Socialist Calculation: the competitive solution”. *Econometrica*, 1940.

## 2. ハイエクを通してオーストリア学派にとっての「市場」と自由概念

ケンブリッジのJ. M. ケインズ Keynes, John Maynard 『一般理論 The General Theory of Employment, Interest and Money』(1936) の登場に直



面して、ハイエクが新しい体系を構築しようとしたのが『純粹資本理論The Pure Theory of Capital』（1941）であった。ケインズはそれに先立ち、『貨幣改革論A Tract on Monetary Reform』（1923）、および『貨幣論A Treatise on Money』（1930）を出していて、オーストリア経済学の流れとは別のアプローチであるが、セイの法則を否認し自然利子率と貨幣利子率、投資と貯蓄の区分から景気循環を説明するヴィクセルを通っている<sup>19)</sup>。

しかし、新古典派経済学理論の分野でハイエクが本格的に活動するのは、時間を待たなくてはならない<sup>20)</sup>。

The Pure Theory of Capital. Chicago: University of Chicago Press, 1941.

“The Ricardo Effect”. *Economica*, 1942.

“The Facts of the Social Sciences”. *Ethics*, 1943.

“A Commodity Reserve Currency”. *Economic Journal*, 1943.

上記のハイエクの金融貨幣諸論は、ケインズ派並びにサムエルソンに代表された経済学主流からは無視されていた。その間に彼が書き上げたのが、

The Road to Serfdom. London: George Routledge & Sons, 1944.

“The Use of Knowledge in Society”. *American Economic Review*, 1945.

Individualism and Economic Order. London: George Routledge & Sons, 1948.

“The Intellectuals and Socialism”. *University of Chicago Law Review*, 1949.

がある。特に44年の書The Road to Serfdom は、戦後56年アメリカ版で広まり、我が国でも一谷藤一郎訳『隷従への道：全体主義と自由』東京創元社が刊行されている。

ハイエクは1950年にシカゴ大学の社会思想委員会に移ってから以下の仕事を残した。

The Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason. Glencoe, Ill.: Free Press, 1952.

The Sensory Order: An Inquiry into the Foundations of Theoretical Psychology.

彼は、経済の「自生的秩序」に「群淘汰」的な進化論適合を持ち込んでい  
るとされるが、このカテゴリーそのものが彼の経済社会把握とどう整合する  
かで、ミーゼス主義者の把握での「ばらばらな人間を結びつけ合理的選択を  
方向付ける市場過程」として積極的に関わらせる意味合いとは違い、ハイエク  
では「社会を孤立した単なる個人の集合以上のもの」と把握していたとし、学  
位論文を出したときの主査ヴィーザーの副査教授（国家学）であったシュパン  
Spann, Othmarからの影響を明記的に指摘する。それによると、個人の精神  
と行動が普遍的な社会全体（全体）によって決定付けられるとするシュパンの  
いう「普遍主義Universalism」からで、これまでの1920年代からの景気循環  
論や資本論の一連の研究とは離れており、ある意味で議論立てには「方法論  
的全体主義」の要素がついているということで「転換」を意味しないか、と  
いうのである<sup>21)</sup>。

ハイエクのヴィーザーへの献本論文を含め、「市場競争は知識（情報）の獲  
得過程である」という記述にメンガーやヴィーザー、そしてミーゼス由来の方  
法論的个人主義を超え若しくは外れていたかどうかの判断が問われるが、それ  
にはここでは触れない。ただ、ヴィーザーにしてもメンガーの見解（「貨幣は  
社会繁栄のために有用であるが、社会制度若しくは実体法として意図的に確立  
されたのではなく、歴史的に発達してきた意図せざる産物」）であるとしても、  
実態となっている社会運営において再定義されるところをハイエクは見えていた  
という観測もあながち否定出来ない。難しいところである<sup>22)</sup>。

勿論、メンガーとともにヴィーザーが歴史学派を継承しつつ乗り越えてきた  
視点、国民経済とは「国民そのものの生の直接的表現」（民族の表現とも呼ぶ  
個人を超えた全体が持つ記憶）ではなく国民無数の個的な行動すべての集  
成（集計量）である、とする視座は争えないオーストリア学派のもので、後  
年にミーゼスが強調的にハイエクに念をおすように諭し続けるところなのだ。

ミーゼスは多分にハイエクにあるシュパンの跡形（社会に時代を越えて継承共有される知識（情報））が気掛かりであったのかも知れない<sup>23)</sup>。

橋本努は、ミーゼスとハイエクを対称させるためにポパー Popper, karl を介在させ、彼の社会政策の課題が諸個人の「幸福の最大化」ではなく「苦痛の最小化」であるとすれば、社会をミーゼスの諸個人の行動の動因を苦痛の排除という消極的功利は各人の行為に任されている事柄での理性的に判断できる人間であれば市場経済の普遍的な有益性や功利性を理解し制度を選択できると想定していたとすれば、ハイエクの立場は反合理的かつ反功利主義的でポパーおよびミーゼスと対称的とする。ハイエクにとって人間は明確な知識に基づいて功利的ルールを設計したのでなく「個々の行為の帰結において無知」であるからこそルールを発展させてきた、と<sup>24)</sup>。

橋本は、こうしてミーゼスの啓蒙的理性的合理主義と一味違ったハイエクを肯定的に評価して、「ハイエクの真意は、理性に対する懐疑をもって、一層理性を成長させることにある」とし、政府が貨幣を管理するという「理性的営み」を懐疑して次節3で考察する「貨幣発行の自由化」を主張することによって「一層理性的な貨幣供給」のための条件を提案したとし、それは「理性を意識的に管理することから解放し、諸個人が一定のルールに従うこと」として透視している<sup>25)</sup>。

“Degrees of Explanation”. *British Journal for Philosophy of Science*, 1955.

“The Dilemma of Specialization”. *The State of Social Sciences*, Chicago: University of Chicago Press, 1956.

*The Constitution of Liberty*. Chicago: University of Chicago Press, 1960.

“The ‘Non Sequitur’ of the ‘Dependence Effect’”. *Southern Economic Journal*, 1961.

ハイエクはその後の1962年にシカゴ大学からの退職後年金の不給のためドイツに戻り70歳になるまでフライブルグ大学に奉職、そしてザルツブルグで余生の生涯を迎える。

“Rules, Perception and Intelligibility”. *Proceedings of British Academy*, London, 1962.

“Wirtschaft, Wissenschaft und Politik”. *Freiburger Universitätsreden*, N. F. Heft 34, 1963. “The Economy, Science and Politics”. *Studies in Philosophy, Politics and Economics*. 1967.

“The Legal and Political Philosophy of David Hume”. *Il Politico*, 28(4), 1963.

“The Theory of Complex Phenomena”. *The Critical Approach to Science and Philosophy: Essay in Honor of Karl R. Popper*. New York: Free Press of Glencoe, 1964.

“Kinds of Rationalism”. *The Economic Studies Quarterly*, 15(3), Tokyo, 1965.

“Principles of a Liberal Social Order”. *Il Politico*, 31(4), 1966.

“Dr. Bernard Mandeville, 1670-1733”. *Proceedings of British Academy*, 52 (1966), 1967.

*Studies in Philosophy, Politics and Economics*. London: Routledge & K. Paul, 1967.

“Der Wettbewerb als Entdeckungsverfahren”. *Kieler Vorträge*. N.S. 56, 1968. *Freiburger Studien: Gesammelte Aufsätze*. 1969. “Competition as a Discovery Procedure”. *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*. 1978.

*Freiburger Studien: Gesammelte Aufsätze*, Tübingen: Mohr, 1969.

“The Primacy of the Abstract”. *Beyond Reductionism, Alpbach Symposium*, London, 1969. *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and History of Ideas*. 1978.

“Three Elucidations of the Ricardo Effect”. *Journal of Political Economy*, 1969. Ibid.

*A Tiger by the Tail: A 40-Years' Running Commentary on Keynesianism* by Hayek. London: Institute of Economic Affairs, 1972.

*Law, Legislation and Liberty*, 3 volumes, London: Routledge & K. Paul, 1973-79.

“Tribute to von Mises, Vienna Years”. *National Review*, 1973.

こうした経緯が語ることは、ハイエクはウィーンのオーストリア学派の恩師ヴィーザーとバーム＝バヴェルクに師事し、先輩にあたるルードヴィヒ・フォン・ミーゼスのPrivatseminarに学び、ともに、「自発的秩序」を考慮することで市場は分散した不均質な自己中心的エージェント集団の限られた知識に基づく「相互作用（関係性）から、調和のとれた進化する秩序がうまれる」という発想に立ち戻ったということである。なお、ハイエクはこの「関係性」をマッハMach, Ernstの哲学から得た概念であるとのべている<sup>26)</sup>。

ハイエクは、政治論や法学研究と結びつけ政治、社会、法、経済制度の進化をこの「進化する秩序（市場）」の研究に取り組んだという点で、ハイエクは正しくオーストリア経済学の視座を持ち続けたことになり、このこともあって「進化経済学」の始祖の一人とされたが、このスプリングボードこそが、後年のノーベル賞受賞に繋げる舵取りをなしたとしても言い過ぎにならないだろう。しかし、ホッペHoppe, Hans-Hermannは書いている。

「モンペルラン・ソサイエティーに関しては、当初から、懐疑があった。ハイエクの教師で友人だったルートヴィヒ・フォン・ミーゼスが、ハイエクの初めの招待者たちを見ただけで、彼の計画に関して、厳しい疑いを表明していた。認定された国家干渉主義者たちでいっぱいソサイエティが、どうやって、自由で繁栄する国という目標を促進できるのだろうか。<sup>27)</sup>」

ともあれ、苦節ののちハイエクは1974年にはグンナー・ミュルダールと並んでノーベル賞を共同受賞した。晩年にかけての彼の業績は、

“The Pretence of Knowledge”. (Les Prix Nobel en 1974) *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978.

Denationalisation of Money: The argument refined, An Analysis of the Theory and Practice of Concurrent Currencies. London: Institute of Economic Affairs, 1978.

New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas. London: Routledge & K. Paul, 1978.

“Can We Still Avoid Inflation?” (orig. 1970) *The Austrian Theory of the Trade Cycle and Other Essays, Center for Libertarian Studies (Occasional Paper Series 8)*, New York : Center for Libertarian Studies, 1978.

“Towards a Free Market Monetary System”. *Journal of Libertarian Studies* 3 (1), 1979.

Money, Capital and Fluctuations: Early essays, Routledge & K. Paul, London, 1984.

The Fatal Conceit: Or the errors of socialism. Routledge & K. Paul, London, 1988.

The Fortunes of Liberalism: Essays on Austrian Economics and the Ideal of Freedom., London: Routledge, 1992.

ハイエクは、“Investment that Raises the Demand for Capital” (1937) について語った際に、「私の経済上の見解だけでなく、政治上の見解の多くの基礎となっている決定的ポイントになっている」のが「限界効用分析のモデル全体の帰結」としての「知識利用のシステム」としての「市場」という考え方と述べている。つまり、そこで利用される知識（情報）というのは「それは誰しもが全体としてもつことができない」ので、「市場の状況を通してのみ」得られる知識であり、「その全体が抽象的なシグナルのなかに凝縮されている」ようなメカニズムを指して言う、と<sup>28)</sup>。

ハイエクは、ミーゼスが「社会主義社会ものとは経済計算は不可能」とした1920年論文“*Die Wirtschaftsrechnung im sozialistischen Gemeinwesen*”におけるオスカー・ランゲへの批判で言及した価格論を引き合いに出して次のように述べている。それは、「資本主義社会の企業家がつ情報の殆どが競争的市場で決定される市場価格（貨幣価格）」で、「数百人もの企業家たちに分散している情報」はそれがなければ誰ひとりとして知ることができない「資源の

配分にとって不可欠」なものである、と<sup>29)</sup>。戦間期の社会主義経済計算論をめぐって、ハイエクはランゲを批判したミーゼスに則って「中央政府当局がすべての生産活動を管理する」ことでなく、市場では「様々な生産要素の相対的な希少性を知るための価格メカニズム」選択を行ったのである<sup>30)</sup>。1946年論文「競争の意味」で、市場経済が社会主義的計画経済に比して競争を通して社会に分散する局地的・暗黙的知識（情報）を収集利用することに優位性を求めた。これは、完全競争や需給均衡に基づく新古典派の近郊論的市場論と違って、知識の発見的手続きとして競争をおき、市場を技術や知識を新たに創造・発見・伝播させるネットワークとして理解するものであった<sup>31)</sup>。

1960年論文「自由の条件 The Constitution of Liberty」では、市場を人為的設計にはよらない適応的進化に基づいた「自己組織的システム」として定義する<sup>32)</sup>。ここで改めて、ハイエクにおける自由 Freiheit 定義である。社会主義は、その経済合理性としての価格決定のメカニズム（市場）を「意図的に」作動しないようにし、それに代えて「中央当局がすべての生産活動を管理」という問題性で否定されることは既にみた。彼の著作の政治的主著をなす『隷属への道』（前出）との繋がりには、「情報が伝達される過程」としての「公定された価格（つまり、中央計画局が決定した価格）」の虚構性に求められて、ランゲやシュンペーターの理論への批判として「分散した市場の知識を中央に結集できない」（すべきではない）とされている<sup>33)</sup>。

ハイエクは、ゾンバルト Sombart, Werner とプレング Plenge, Johann を批判して、「1914年にドイツに起こった戦時経済」こそが「最初に実現した社会主義社会」と論断することでプレングに向けた次の言葉がある。

「ドイツは、観念の世界においてすべての社会主義的夢の最も信頼のおける代表者であり、現実の世界においては、最も高度に組織化された経済体制の最も有力な建築家であった。同じ時にイギリスでは、世界史的な原理が最終的に崩壊するという素晴らしい光景を露呈している<sup>34)</sup>。」

なお、ヴィーザー文庫にはゾンバルトの以下が所収されている。

No.0053 *Einleitende Bemerkungen zu einer Theorie des modernen Kapitalismus.*

(Erscheint demnächst in 2 Bänden im Verlagen von Duncker & Humblot in Leipzig. Diese Abhandlung bildet einen Teil des Geleitworts.)

No.0124 *Versuch einer Systematik der Wirtschaftskrisen, Separat-Abdruck aus dem Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 19. Band, 1. Heft, Tübingen, 1904.

No.0914 *Probleme der Wirtschaftsgeschichte, Sonderabdruck aus Schmollers Jahrbuch*, 44. Jahrgang, 4. Heft, München. 1920. 併設: 大市大

こうした「イギリスの競争体制と（ビスマルク以来）プロセイン・ドイツの「経済管理」体制との根本的相違」への認識に達するまで、ハイエクと彼に先立つオーストリア学派はサークルからシュパンを切り離さなくてはならなかったか、シュパンから離れていったのではあるが、ヴィーザー文庫には彼からの謹呈文献が多く含まれている。

No.0054 *Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre auf dogmengeschichtlicher Grundlage, Wissenschaft und Bildung: Einzeldarstellungen aus allen Gebieten des Wissens*, 95, Leipzig, 1911. 併設: 一橋古典 Mengarほか

No.0055 *Der logische Aufbau der Nationalökonomie und ihr Verhältnis zur Psychologie und zu den Naturwissenschaften. Ein methodologischer Versuch, Separatdruck aus der Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Tübingen, 1908. 併設: 一橋古典 Mengarほか

No.0056 *Die mechanisch-mathematische Analogie in der Volkswirtschaftslehre, Separatdruck aus Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.30, Heft 3, Tübingen, 1910. 併設: 一橋古典 Mengarほか

No.0316 *Theorie der Preisverschiebung als Grundlage zur Erklärung der Teuerungen, Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, 22.



- Bd., Wien, 1913. 併設: 一橋古典Mengar
- No.0414 Erhebungstechnische Probleme der österreichischen Volkszählung, *Separatabdruck aus der Statistischen Monatschrift*, Jhrg.1909, Brünn 1909. 併設: 一橋古典Mengar
- No.0603 Zwei neue Bücher über Tausch und Geld, *Abdruck aus Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 123, Jena, 1925.
- No.1192 Die Erweiterung der Sozialpolitik durch die Berufsvormundschaft, *Aus dem Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Tübingen, 1912. 併設: 阪市大セほか
- No.1193 Kantische und Marxische Sozialphilosophie, *Archiv für die Geschichte der Sozialismus und des Arbeiterbewegung*, *Sonderabdruck aus* Bd.2, Heft 1, Leipzig, 1911. 併設: 一橋古典Mengar
- No.1194 Die Verpflegungsverhältnisse der unehelichen Kinder, Besonders in ihrer Bedeutung für für die Sterblichkeit betrachtet, *Separatabdruck aus Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.27, Heft 3, Tübingen, 1908. 併設: 一橋古典Mengar
- No.1247 Auguste Comte, *Sonderabdruck aus der Zeitschrift für Socialwissenschaft*, XI. Band, 7./8. Heft, Leipzig, 1908. 併設: 一橋古典Mengar
- No.1248 Soziologie, *Sonderabdruck aus Jahrbücher der Philosophie*, Erster Jg. Berlin, 1913.
- No.1249 Zur Soziologie der Nation, *Sonderabdruck aus der Wochenschrift "Die Geisteswissenschaften"*. 1 Jg. 1913/14, Heft 5, Leipzig.

ハイエクの学位論文“Zur Problemstellung der Aurechnungslehre”(1923)を発展させたNo.0713(後述)は、シュパンをも編者とする雑誌に掲載され当文庫に残されている。

シュパンはプレングやレンシ Lensch, Paulとともに、国家社会主義(ナチ

ズム)の先駆者とされるシュペングラー Spengler, Oswaldやブルック Bruck, Arthur Moeller van den のために指導的観念(旧いプロセイン精神と社会主義的信念との同一性)を掲示した世代とされている。そうした観念は当時においては、ドイツ帝国議会の社会民主党左派の論客ナウマン Naumann, Friedrichをも包み、戦争を「社会主義の前進によるイギリス的ブルジョワ階級の逃避」とする。そして、「国家は社会化の方向に進み、社会民主主義は国有化の方向に進んでいる」、と。ハイエクは、オーストリア学派、とりわけミーゼスを継いで、同じ語圏のドイツを「敗北させられた自由主義」に陣し、戦前から戦中に至るそのドイツの自由主義に対するあらゆる様式の闘いは「社会主義者と保守主義を共同戦線に結合させた共同の概念」であったと主張するのも厭わなかった<sup>35)</sup>。

ミーゼスは、アメリカ社会科学アカデミーのフィラデルフィア大会(1945年)で、「計画」概念についてこう述べている。

「計画化planning」という用語は、社会主義・共産主義、そして独裁的・全体主義的な経済管理の同義語でよく使われている。たまには、ドイツ型社会主義 Zwangswirtschaft が計画化と呼ばれ、社会主義の用語一般はあらゆる工場・商店・農場の徹底した社会化と官僚制的機構のロシア型にとって置かれる。この意味での計画化とは、政府による全面的計画化と政治権力による諸立案の強制である。この意味の計画化は事業である。それは、自由企業・私的イニシアティブ・生産手段の私的所有・市場経済並びに価格システムの完全な政府統制を意味する。計画化と資本主義は、両立し難い<sup>36)</sup>。

そして、「ケインズたちがいう意味では全体主義的隷従を自由にとって替えるようにするのでなく自由社会のために計画することを考えている」とすることで、社会経済的機構の問題解決の第三の道を考案しようとしていることを批判的に同書で論じていく<sup>37)</sup>。

### 3. ハイエクの信用経済論，とくに貨幣発行の自由化をめぐる

ミーゼス *Theory of Money and Credit* (1912) の理論的示唆を受けてハイエクが初めて景気循環理論を起草したのが『価格と生産 *Prices and Production*』(1931)。この研究は，好況と不況の循環が，なにか資本主義の「内在的矛盾」によってではなく，インフレ的貨幣的要因をなす「銀行信用拡大」によって引き起こされているということを提議するのである。信用市場への，本物の貯蓄によって担保されていない信用創造が政府の中央銀行による与信によって発生するということを証明した。「貨幣理論と景気循環」，「価格と生産」，「貨幣国家主義」の一連の三著作で，ハイエクの1974年のノーベル賞は，このミーゼスとハイエクの景気循環理論に対する彼の初期の貢献を表彰したのであるが，ミーゼスは，生涯にわたる紙幣と政府の中央銀行業の敵対者，そして金本位制復帰の提唱者と看做され，そして，ノーベル経済学賞の賞金は，スウェーデン国立銀行からの「寄贈」であり，言ってみれば，「好ましからざる人物」ミーゼスが1973年に死んで初めてハイエクに賞を与えることが出来た，としたことをホッペは後述している<sup>38)</sup>。

ハイエクは，1929書の英訳版 *Monetary Theory and the Trade Cycle* (1933) で，「中央銀行が信用拡大（金融緩和）政策という不況対策をいち早く断行してきたのに，不況はこれまで経験したことのない深刻な状態に陥り，永続しているのは何故なのか」という問題提議を行っている<sup>39)</sup>。かい摘むと，彼は，貨幣的要因によって起こる生産構造における「継続的变化」が景気循環を発生させている，とする説明を行ったのである。その貨幣的要因ということに1933年の書（英訳版）が当てられ，それがもたらす生産構造における変化については『価格と生産 *Prices and Production*』(1931) で分析がなされている<sup>40)</sup>。ハイエクのこの着想は既に，ヴィーザー文庫収蔵の文献

No.0713 Hayek, F. A. *Die Währungspolitik der Vereinigten Staaten seit der Überwindung der Krise von 1920, Sonderabdruck aus Neue Folge*, 5.Band, Heft

において初期の大まかなデッサンがなされているが、後年ミーゼスの配下での実務から得られた知見が加わっていて、今日的なIMF体制下の中央銀行制に向かった当時の流れへの彼の先見的な批判的理論理解がなされている<sup>41)</sup>。彼は、ミーゼスたちと直面していた時期のテーゼを振り返りながら、こう言っている。

「もちろんミーゼスが言うように、中央銀行はインフレ主義のイデオロギーの圧力を受けて、常に信用拡大を試み、従って景気循環の新たな亢進を与えると仮定することは出来るが、こうした景気変動は現行信用制度のもつ内在的傾向のもたらす必然的結果ではない。こういう指摘は、時局が変わっているのだということであって、信用拡大という信用膨張（今日的に言うと金融調節）は、中央銀行からの与信とするよりも「第三の要因、つまり商業銀行による「信用創造」」が内在的な要因として指摘されている<sup>42)</sup>。

「（発券銀行である）中央銀行は通貨流通量を変えることのできる唯一の機関ではない。否、中央銀行もほかのいろいろな要素に大きく依存している。もっとも、中央銀行はそれら要因にかなりの程度の影響を与えたり補正したりは出来る<sup>43)</sup>。」

指摘した三つの要因とは、①金の流出入によって生じる現金流通量の変化、②中央銀行券流通高の変化、そして③一般銀行による預金の「創造」で、うち③の要因が商業銀行機能の一般銀行組織全体のもとでの敷衍による不可避的周期的に生じる収束無限級数的な「預金額以上の信用創造」という現在経済システムとしての内在的特徴を表現すると<sup>44)</sup>。

後年のハイエクは、1960年代に入ると、支払手段という貨幣を別に法によって指定される必要があるのかと、その「脱国営化」を主張するに至る。法定通貨（中央銀行による貨幣発行権）を「国営化」として捉え、その民営化をさえ求めている。

「政府が何もしなくても、貨幣、それも非常に満足のいく貨幣が存在もしうるし、存在してきた。」と、メンガーが取り上げたファラー Farrer, Lord<sup>45)</sup> の法定通貨の持つ「住民の意思に反しての強制通用 Zwngskurs 若しくは紙幣発行特権 Notenregal の乱用」に言及している<sup>46)</sup>。流通圏域は一国全域でもなく、また国境を跨ぐこともある「共存する諸通貨」の中から住民は望ましいものを選択利用し、その貨幣機能は劣化せずに常に市場の売買や貸借に価値基準を享受できる。「インフレやデフレを伴わない安定した価値」をもつとする「良貨」を、「適切な価値基準」という基準をめぐって多数の並立した通貨がを競い合わせる。そして通貨の間は変動レートで代替性をもつ。金本位制ならいざ知らず、政府が貨幣管理独占している限り、ハイエクはこの「貨幣国家主義」は行き詰まる、と<sup>47)</sup>。

しかし、ハイエクは、通貨の発行・販売・管理を非国営化して複数機関の間の競争を導入することを提言しているに止まる<sup>48)</sup>。彼の前提は、ケインジアン経済学への批判的知見があつて、金融政策が財政政策との「不浄な結婚（財政上の必要：公共支出の統制不可能な増大）を解消する」ことを緊急とすることがあった。これは、中央銀行に対してインフレーション主義的バイアスをかけている、ということである<sup>49)</sup>。

批判的是正はもう一点あつて、「政府に予算を暦年ごと均衡させるように求めるのは恣意的でさえある」と。そして、貨幣に対する独占権の（法的通貨）が「中央集権化を助長」しているという<sup>50)</sup>。

時代を下って、Denationalisation of Money: An Analysis of the Theory and Practice of Concurrent Currencies (1976), The Argument Refined (1978) の Ch.20「通貨権」のハイエクをみておく。76年版序文で、「市場秩序の重大な欠陥」を市場秩序が循環的に不況と失業の時期に見舞われやすいという認識があり、これは「貨幣発行がずっと昔から政府に独占されていた」ということの「結果」である、とする断定がある<sup>51)</sup>。ところで、『岩波=ケンブリッジ世界人名辞典』（岩波書店、1997年）では、ハイエクが「マネタリズムの父」と呼

ばれるとの誤りの記述であったことは既に指摘を受けている。ハイエクは中央銀行が貨幣を独占的に供給する制度そのものを厳しく批判していたことであり、オーストリア学派自体の貨幣信用論が正確に以上のように整理されるはずはなかったのである。心証正銘の「マネタリストの父」であったのはむしろアーヴィング・フィッシャー Fisher, Irving で、ニューヨーク株暴落直前の1929年10月、「株価は永久に高い水準に保たれる」としていた。一方、ハイエクは同年初め、連邦準備理事会が金融緩和政策をやめると決めたことから、米国景気は数カ月以内に崩潰するだろうと述べていたのである<sup>52)</sup>。

ハイエクが Denationalisation of Money (1978) で以上のように提議した「脱国営化貨幣」（貨幣発行の自由化）についてであるが、それは、ゲゼル Gesell, Silvio が推奨していた「減耗貨幣 Schwundgeld」やダグラス Dougals, C. H. たちのように「政府独占の不当な制約」から放たれた「より多くの貨幣」のための「自由貨幣 Freigeld」とした主張とも違っていて、「貨幣の過剰供給」を防止するというコンセプトとした「貨幣の自由な取引」のための計画であった。このところは、現行EUへの批判的コメントとして語られた箇所でもあり、少し見ておきたい。彼は書いている。「(それは) 粗悪な通貨はただちに他の通貨によって排除されるということで、実質的に信頼や便利さの劣るような貨幣を発行できないようにすることで、現存する金融機関に極めて緊要な規律を課するような」システムなのである、と<sup>53)</sup>。

こうして、現代に至るオーストリア学派の系譜をおってみると、ヴィーザーの世代の役割が何であったかの検証を要する。

本文庫には、前承のようにヴィーザー本人の文献は含まれていないが、彼が編纂に関わった幾編かの文献が当文庫にある。

No.0681 Schanz, G. Erbschaftssteur, *Sonderabdruck aus dem III Band des Handwörterbuchs der Staatswissenschaften. Vierte Auflage.* Heraus. von L. Elster, Ad. Weber, Fr. Wieser, Jena, 1925.

No.0682 Schanz, G. Ertragsteuern, *ibid.*

No.0683 Schanz, G. Existenzminimum und seine Steuerfreiheit, *ibid.*

No.0713 Hayek, F. A., Die Währungspolitik der Vereinigten Staaten seit der Überwindung der Krise von 1920. *Sonderabdruck aus Neue Folge*, V.Band, Heft 1 Bis 3: *Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik*. Herausgegeben von Hans Mayer, Richard Reisch, Othmar Spann, Friedrich Wieser, Wien, 1925.

No.0741 Löwenfeld, Walter, Die Statistik der Direkten Steuern in Ungarn, *Sonderabdruck aus der Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*. Herausgegeben von Eugen von Böhm-Bawerk, Karl Theodor v. Inama-Sternegg, Eugen v. Philippovich, Ernst v. Plener, Friedrich Freiherr v. Wieser, Wien u. Leipzig, 1905.

No.0753 Meyer, Robert. Soll und kann die Hauszisststeuer in eine Mietsteuer und eine Hausgrundsteuer zerlegt werden?, *ibid.*

ヴィーザー文庫に収蔵のハイエクを含む寄贈文献のいくつかは、当時の金融信用論のデビュー学術誌で晩年におけるヴィーザーの査読を経て公表されていたことが窺われる。繰り返すが、彼のノーベル経済学賞は初期のミーゼスとの関わりで与えられているが、このNo.0713で素地は出来ていた。ロスバード Rothbard, Murray N. *The Present state of Austrian Economics* (1992)<sup>54)</sup> は、ミーゼス主義というスタンスでハイエクの哲学と貨幣信用論からオーストリア経済学のエッセンスを区別して、次のように言っている。

「ミーゼスは貨幣と貨幣価値論をミクロ限界効用並びに需給論に統合し、貨幣論を景気循環論のうえの構築した。初期のハイエクもまたミーゼスの景気循環論に依った著書で、後日にノーベル受賞した。確かに、貨幣と景気循環論より以上の「マクロ」的とするものは見当たらない。そして後期ハイエク（著者はハイエクⅡと名付ける）はこのことに殆ど配しなくなっていて、ハイエク主義者たちもそうで、カーズナーはもっぱらミクロをやりマクロには何の貢献も

なさないでいる<sup>55)</sup>。」

なお、本文庫には Irving Fisher からの文献が以下のように多く含まれている。

No.0073 Precedents for defining capital, Reprinted from *The Quarterly Journal of Economics*, Vol.18, No.3, 1904.

No.0227 (u. Bauer, Stéphan), La hausse des prix et la puissance d'achat des salaires, Extrait du *Bulletin des Ligues sociales d'acheteurs, France et Suisse* (4e trimestre 1911, 1er trimestre 1912), Dijon, 1912.

No.0248 The high cost of living, Reprinted from *The Manufacturer's Journal*, Brooklyn, 1912.

No.0249 An international commission on the cost of living. Reprinted from *The American Economic Review*, Vol.2, No.1, supplement, 1912.

No.0250 Is the high cost of living going higher?, Reprinted from *the North American Review*, New York, 1912.

No.0251 A weekly index number of wholesale prices, Reprinted from *the Quarterly Publication of the American Statistical Association*, September 1923, Boston.

No.0252 Will the present upward trend of world prices continue?, Reprinted from *the American Economic Review*, September, 1912.

No.0463 “The equation of exchange” 1896-1910, Reprinted from *the American Economic Review*, New York, 1911. 併設: 一橋古典 Menger

No.0464 “The equation of exchange” for 1911 and forecast, Reprinted from *the American Economic Review*, New York, 1912.

No.0465 “The equation of exchange” for 1912 and forecast, Reprinted from *the American Economic Review*, Vol.3, No.2, New York, 1913.

No.0466 Instability of gold. New York, 1922.

No.0467 A more stable gold standard, Reprinted from *the Economic Journal*,



December, 1912, London.

No.0468 Objections to a compensated dollar answered, Reprinted from *the American Economic Review*, Vol.4, No.4, New York, 1914.

No.0470 A practical method of estimating the velocity of circulation of money. Reprinted from *the Journal of the Royal Statistical Society*, Vol.72, No.3, London, 1909.

No.0471 A stable monetary yardstick the remedy for the rising cost of living. Reprinted from *the Independent*, September 26, 1912, New York.

No.0472 Stabilizing the dollar, Reprinted from *The Stabilization of Business*, New York, 1923.

No.0473 Stabilizing the dollar, Reprinted from *Harper's Magazine*, New York, 1924.

No.0693 Banking Policy and Unemployment, Reprinted from *the American Labor Legislations Review*, New York, 1925.

## 4. 小括

いまのヨーロッパでは、欧州中央銀行ECBが1998年6月にEuropean Economic and Monetary Unionの中央銀行として設立され、圏外のデンマーク国立銀行とイングランド銀行は別にユーロ圏の紙幣発行について排他的権限を有する。そして、その運営にあたっての欧州中央銀行制度は欧州中央銀行および欧州連合加盟27か国の中央銀行で構成されている。こうした体制づくりを批判したハイエクの見解は以下のようであった。

「このヨーロッパ通貨は、「あらゆる貨幣悪の根源」をなす「政府による貨幣の発行と管理の独占」をより強固に定着させてしまう。この考え方は採用される機会はない。むしろ、各国政府の通貨が公衆の利益のために競争する利点を悟るだろう。西ヨーロッパの経済統合を西ヨーロッパ間での貨幣の流れを完全

に自由化することによって完成する要望に強く賛成する。

しかし、このことがある「超国家的機関」によって管理される「新しい単一の国際通貨（ヨーロッパ通貨）を創出することが望ましいかに大いに疑問をもつし、とてもありそうにない<sup>56)</sup>。」

こうした彼の見解の背景には、貨幣の自由な市場取引（調整は貨幣間の変動相場）を「銀行業での取引の自由化」として拡張制度化しようという実験的試みがあったのだと察することが出来よう。それには、①私的に発行される小切手使用の銀行預（り）金（市中銀行貸方、所謂マネーストック）、②現行の各国ごと「基礎貨幣basicmone」の管理の延長になる拡大された現行EUのような「共同通貨」へもハイエクの懸念があった。それは、「貨幣国民主義 monetary nationalism」を未だ離脱できていないことになり、超国家の権力を強める手段で中途半端になる<sup>57)</sup>。

代わって提言される「競合する通貨 concurrent currencies」について、「その提言が基礎としている原理」として、ハイエクが何をあげているか。彼は、民間に「貨幣発行を認めるべき」と、そして言う「もし政府独占が廃止され、貨幣の供給が各種の通貨を供給する民間会社の競争に開放されるならば、どういうことになるか<sup>58)</sup>。」それは、通貨に関しては国境を完全に廃止されて、各地域での競争通貨が自由に発行されていることで、通貨圏というような「いくつかの通貨に優位が認められているような地域」が形成されていなければならないことになる。「ひとつの通貨が支配的であるような地域」が固定した境界を持たなく、それらの大部分が「重なり合って、その境界線が流動的あり、人々が流通させる通貨の発行期間を選ぶことが出来る」のであれば、それは「どこまでも急速に広がっていき」「為替統制がなくなることにより信頼しあえ文明化した国の証」となる<sup>59)</sup>。

このハイエク提議に真正面から異議建てしているのが前に触れたミーゼス主義オーストリア学派のロスバードである。

「来るべき自由市場世界は、世界規模のひとつの純正金属貨幣圏として成立

つ。銀行紙幣の増加というのは許されるべくもなく、その实在の財産権への侵害である。貨幣供給は、世界金のストックの緩やかな増大に付随して、ゆっくりと増大していく。インフレーションの惨害は最終的に世界から取り払われ、経済をより生産的、財の供給はより増大され、物価低落し、生活費は減下し、すべてのひとの生活水準はより向上するだろう。景気循環からの浮き沈みもない。投資は自発的貯蓄に制約されていて、不健全な投資からの景気後退による清算という周期的な暴発もなく、世界の統一体は、政府体の一切関わらなく市場によって全体として決定された市場価値によって求められる貨幣によって最終的には保証される。

消費者経済は、限りなくより自由でより健常であろう。この市場統一体の発展から失う者とはいうと、それは政府・銀行に制御されたインフレーションから利を得ているような、そして州統治経済において支配権を有する選良を構成している社会的利権グループなのである<sup>60)</sup>。」

その世界経済の一体性を市場価値でだけ決めるような貨幣をミーゼスはone metallic money (=coin) としたのである。意を同時にしてケインズは「世界紙幣 bancor」という貨幣を発行する世界中央銀行（World Reserve Bank）をめぐる構想をアメリカ・ドルを基軸通貨としたホワイト提案への対案として来る IMF 設置の議論に提出していた。

今ひとつの論点は、（当時であって専ら）インフレーションの原因を「その多くは政府による経済への介入」とするミーゼスおよびハイエクといったオーストリア学派に見られる見解である。こうした見地から現代のオーストリア学派の集約的解書とされているのがハズリット Hazlitt, Henry の『世界的シンプルな経済学』（村井章子訳・日経BP）である。それによると、そうした介入は一部の集団の目先の利益だけを考えて行われ、現在もなお一段と強固に継続されている、ということになる。各国の政府は、自ら招いた失業を公共事業で救済しようと、ますます税金を重くし信用創造（国民からすれば借金を熱心

に) 奨励しているとし、その理論的バックボーンにケインズおよびケインズの政策を対照とする<sup>61)</sup>。

確かに、今日的に言うところ、デフレーション・不況を「それに先行するインフレーションに対する調整」とした見地がミーゼスやハイエクのものだったとするのではあるが、果たしてそうだったと断定できるであろうか。岩田部昌澄は、このことで彼らオーストリア学派のマクロ的政策（金融緩和）を否定するとしたこととは別だとして、その鍵がオーストリア学派の貨幣論に、つまり不況が貨幣的要因に関わらないのか関わるのかをめぐるところの検証が必要であるとしている<sup>62)</sup>。その意義からも、ヴィーザー文庫に収録された文書番号No.0110-0127はミーゼス、ハイエクの理論形成の初期の傍証的研究に打って付けの史料を提供してくれる<sup>63)</sup>。

本文庫収蔵の諸文献のひとつひとつについて、その理論形成のうえに意義付ける作業に当たって、収蔵のカール・メンガー文庫を整理しつつあった東京商科大学が1925年に創立50周年を迎えて刊行した『記念論文集』に所収の内藤章の「名目学説と貨幣制度改革」で講評しているものと照合してみた。現在の世界各国においてIMF体制の下に整序されている通貨発行体制へ至る1925年段階を、内藤はこう整理している。

「世界戦争に因り起こった顕著な事実、紙幣の増発である。戦争の開始と共に交戦国は巨額の資金を調達する必要があった。然るに租税に依り多額の軍資金を得るは困難である。又公債の発行は当初にあっては之に依頼するは困難である。故に諸国に於いて銀行信用（Bank credit）方法に依ったのである。即ち政府は中央銀行から借上げを為し又は公債を発行して中央銀行又は其他の銀行をして割引せしめて残高を作り、之に対し小切手を発行し又は直接に銀行券を得た。この信用は戦争の進むに従って、益々増加した。故に諸国に於いて銀行券の発行高は巨額に達している。政府は銀行券の増発を容易ならしめる為に銀行券の正貨交換を停止すると共に正貨準備に関する規定に変更を加え又は発行最高額を増加して居る<sup>64)</sup>。」

このような様態に整序されていった当時の過程への研究者による取り纏め並びに提言の幾つかを伺える断片が本文庫所収文献にも所在する。

**Bendixen, Friedrich:**

No.0443 Drei Aufsätze zum Geldproblem, *Separat-Abdruck aus dem Bank-Archiv IX.Jahrgang*, Nr.7, 8, 9, Hamburg, 1910. 併設: 東大図

**Liefman, Robert:**

No.0281 Der Abbau der Preise nach dem Kriege und die einmalige Vermögensabgabe, Vortrag gehalten am 11. September 1918 im Hotel Adlon, *Veröffentlichungen des Deutsch-Argentinischen Centralverbandes zur Förderung wirtschaftlicher Interessen*, Heft 12, Berlin, 1918. 併設: 京大図ほか

No.0282 Die Entstehung des Preises aus subjektive Wertschätzungen: Grundlagen einer neuen Preistheorie, *Sonderabdruck aus des Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.34, Heft 1 u. 2, Tübingen, 1912. 併設: 一橋古典 Mengar ほか

オーストリア学派は、新自由主義とされる新古典派にあつて、貨幣流通への既成としての制御システムに満足することなく新たなアプローチを絶えず追求めるという意味で、ヴィーザー門下のシュンペーター、ミーゼス、そしてハイエクが現代に送り出されたと言うのは過言であろうか。

完

**[追補]**

私は、経済学史学会第64回大会(2000.11)の学会50年記念シンポジウム「市場経済の理解と評価」で行った第2報告(市場経済に関する学史的系譜と環境論の位相)<sup>65)</sup>において、制度派経済学の影響をうけていた Frederick Soddy がとる「オープンシステムとしての市場」というアプローチに準じて公的・社会的規制としての市場干渉を肯定的に評価した。オーストリア学派のことは、

43年前に筆した「E.ザリンにおける直観的理論とその社会思想上の特徴－主著『政治経済学：経済政策理念史』に触れて」（修士論文）におけるドイツ国民経済学（歴史学派）の継承関係で考察したに留めたが、ウィーンにおける“freiheit schwärmer”の内面に想いを馳せることはあまりなかった。今回のヴィーザー文庫整理作業を通して学んだことは大きい。

本研究に際しては、以下の諸氏からの助言を戴いている。謝する次第である。野田弘英（東京経済大学名誉教授）、保住敏彦（愛知大学名誉教授）、加来祥男（九州大学名誉教授・福岡工業大学教授）、関源太郎（九州大学教授）。

注:

1:

- 1) Mises, L.v., *Theorie des Geldes und der Umlaufmittel* 2 Aufl. München und Leipzig: Duncker & Humblot, 1924. 東米雄訳『貨幣及び流通手段の理論』日本経済評論社, 1980: 108.
- 2) Böhm-Bawerk, Eugen v., *Positive Theorie des Kapitaless*. Innsbruck: Verl. der Wagner'schen Univ.-Buchhandlung, 1889. *The Positive Theory of Capital*. New York: G.E. Stechert, 1891.
- 3) Wicksell, Knut, *Finanztheoretische Untersuchungen nebst Darstellung und Kritik des Steuerwesens Schwedens*. Jena: G. Fischer, 1896.
- 4) Wieser, F.v., *Der natürliche Werth*. Wien: Alfred Hölder. 大山千代雄訳『自然価値論』有斐閣, 1937: 18-21.
- 5) ミーゼス, 前掲『貨幣及び流通手段の理論』:102. Wieser, F.v., *Der Geldwert und seine Veränderungen*.1909: 514.
- 6) ミーゼス, 前掲『貨幣及び流通手段の理論』: 101-3.
- 7) Schumpeter, J. A., Friedrich von Wieser. *The Economic Journal*, 37, 1927: 328-30. Hayek, F. A. v., Friedrich Freiherrn v. Wieser. *Jahrbuch f. Nationalök. u. Stat.*, 125 (Dritte Folge 70), 1926: 513-30. (安田充訳『貨幣論集』有斐閣, 1941: 3-27). Meyer, H., Friedrich Wieser. *Ein Nachruf, In dem Rektoratsberichte der Wiener Universität*, Wien, 1926.
- 8) 西山千明『旧版解説』『ハイエク全集I－1』春秋社, 新版, 2008:282-3.
- 9) Hayek, F. A. von, Stephen Kresge, Leif Wenar, and Friedrich A. von Hayek. *Hayek on Hayek: An Autobiographical Dialogue*. Chicago: University of Chicago Press, 1994. 嶋津格訳『ハイエク, ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000: 28-72.
- 10) Schumpeter, J. A., *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig: Duncker & Humblot, 1912: 148-152. 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論』岩波書店, 改訳版, 1980: 212-7.
- 11) Schumpeter, *ibid.*151-3. 同上: 215-8.
- 12) 中山伊知郎「解説 2. 静態と動態の問題」『経済発展の理論』1980: 500-1.
- 13) 平井俊顕『ケインズ・シュンペーター・ハイエク: 市場社会像を求めて』ミネルヴァ書房, 2000: 270-1.
- 14) 平井俊顕, 同上, 265-9.
- 15) 村岡到『原典 社会主義経済計算論争』ロゴス社, 1996: xx.  
Mises, L. v., *Die Wirtschaftsrechnung im sozialistischen Gemeinwesen. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, vol. 47, 1920.
- 16) Mises, L. v., *Theorie des Geldes und der Umlaufmittel* 2 Aufl. München & Leipzig: Duncker & Humblot, 1924. 東米雄訳『貨幣及び流通手段の理論』日本経済評論社, 1980: 39.
- 17) Mises, L. v., *Theorie*, 同上: 231.
- 18) 嶋津格訳『ハイエク, ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000: 70

## 2:

- 19) 平井俊顕『ケインズ・シュンペーター・ハイエク：市場社会像を求めて』ミネルヴァ書房, 2000: 66-7.
  - 20) 西山千明「旧版解説」『ハイエク全集Ⅰ－1』春秋社, 新版, 2008: 280.  
Hayek, F. A., *The Fortunes of Liberalism: Essays on Austrian Economics and the Ideal of Freedom*. Edited by Peter G. Klein, *The Collected Works of F. A. Hayek* Vol.IV, 1992: 4-5.
  - 21) 江頭進・冬茂樹「ハイエクに対するシュパンの影響：学位論文とその後」『経済学史学会年報』No.45, 2004: 26-38. 尚, ハイエク自身がシュパンを語っているところによると, 当時ウィーン大学では予算的事情もあってミーゼスほかのPrivatdozent教官でなく常勤教授としてシュパンの講義(*Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre*, Leipzig, 1911)によるメンガー経済学を主題)は, 得がたいものだったとしている。Cf. Peter G.Klein, *The Collected Works of F. A. Hayek*, Vol.IV.: 22-3.
  - 22) Mengar, C., *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere*. Duncker & Humblot, 1883: 141. 福井孝治・吉田昇三訳『経済学の方法』日本経済評論社, 1986: 132.
  - 23) 江頭進・冬茂樹「ハイエクに対するシュパンの影響：学位論文とその後」『経済学史学会年報』No.45, 2004: 35.
  - 24) 橋本努『自由の論法：ポパー・ミーゼス・ハイエク』創文社, 1994: 202-7.
  - 25) 橋本努, 同上: 206. ハイエクは, ミーゼスとは違って金兌換に代えて購買力の安定としての基準を諸銀行の通貨発行とその変動相場(競合)による貨幣流通の制御維持として, 後日, 定義している。Cf., Hayek, F. A., *Towards a Free Market Monetary System: A lecture delivered at the Gold and Monetary Conference*. New Orleans, Louisiana, November 10, 1977.
  - 26) 西山千明「旧版解説」『ハイエク全集Ⅰ－1』春秋社, 新版, 2008: 280.
  - 27) Hoppe, Hans-Herman.-*On Hayek* <http://www.stephankinsella.com/2009/09/hoppe-on-hayek/>
  - 28) ハイエク『ハイエク, ハイエクを語る』: 72.
  - 29) ハイエク, 尾近裕幸訳「社会主義計経済算論争はなんだったのか」『ハイエク全集Ⅱ－10』春秋社, 2010: 109-12.
  - 30) ハイエク, 尾近裕幸訳「資本の節約」『ハイエク全集Ⅱ－10』: 131.
  - 31) 西部忠「解説：貨幣の未来を構想する」『ハイエク全集Ⅱ－2』春秋社, 2012: 297.
  - 32) 西部忠, 同上: 297.
  - 33) ハイエク. 前出『ハイエク全集Ⅱ－10』: 109-16.
  - 34) ハイエク, 一谷訳『隷従への道』(*The Road to Serldom*) 創元社, 1954: 219-20.
  - 35) ハイエク. 同上: 226-9.
  - 36) Mises, *Plannning For Freedom*.: 1.
  - 37) Mises, *Plannning For Freedom*.: 2.
- ## 3:
- 38) Hoppe, *On Hayek*. *ibid*.
  - 39) Hayek, *Monetary Theory and the Trade Cycle*. 1933. 『ハイエク全集Ⅰ－1』: 279.



- 40) 嶋中雄二「解説：ハイエク理論から導かれる金融政策とは何か」『ハイエク全集Ⅰ－1』：287.
- 41) ハイエク『ハイエク全集Ⅰ－1』：66.
- 42) ハイエク. 同上：65.
- 43) ハイエク. 同上：66-72.
- 44) Thomas H. Baron Farrer *Inquiries into Certain Modern Problems Connected with the Standard of Value and the Method of Exchange*. London, 1898.
- 45) ハイエク『ハイエク全集Ⅱ－2』：54-69.
- 46) 西部忠「解説」『ハイエク全集Ⅱ－2』：304.
- 47) 西部忠. 同上：306.
- 48) ハイエク『ハイエク全集Ⅱ－2』：167.
- 49) ハイエク. 同上：171.
- 50) ハイエク. 同上：303.
- 51) ハイエク. 川口慎二訳『貨幣発行自由化論』東洋経済新報社, 1988: iii
- 52) 本文庫所収 No.0713を参考できる。
- 53) ハイエク, 川口慎二訳『貨幣発行自由化論』1988: 2.
- 54) Rothbard, Murray, N. *The Present State of Austrian Economics, the Tenth Anniversary Scholars' Conference of the Ludwig von Mises Institute, October 9, 1992*: 32.
- 55) Rothbard, Murray, N. *ibid.* 32-35.
- 4:
- 56) ハイエク, 川口慎二訳『貨幣発行自由化論』東洋経済新報社, 1988:3-4.
- 57) ハイエク, 同上：4-5, 164-170.
- 58) ハイエク, 同上：9-11.
- 59) ハイエク, 同上：168-170.
- 60) Rothbard, M.N., *The Present State of Austrian Economics*, *ibid.*, p.40.
- 61) Hazlitt, H. *Economics in One Lesson*. New York, 1979. 村井章子訳『世界一シンプルな経済学』日経BP, 2010: 343-9.
- 62) 岩田部昌澄「解説 経済学啓蒙の古典」『世界一シンプルな経済学』：359-62.
- 63) ヴィーザー文庫恐慌論に関する文献一覧。  
 No.0110 Aftalion, A. *Essais d'une theorie des crises générales et périodiques.: Société du Recueil J.-B. Sirey et du Journal du Palais*, Paris, 1909. 併設・神大  
 No.0111 Allard, A. *Die wirthschaftliche Krisis*. Berlin: Walther & Apolant, 1885. 併設：北大ほか  
 No.0112 Blanckertz, S. *Die Ursachen der Stockungen im Erwerbsleben der modernen Industriestaaten: Skizzez. Organisation d. Volkswirthsch.* Berlin: Burmester & Stempel, 1882.  
 No.0113 Busch, E. *Ursprung und Wesen der wirtschaftlichen Krisis: mit Angabe der Mittel zu ihrer Beseitigung*. Leipzig: Wigand, 1892.  
 No.0114 Taeger, K. *Die Einwirkung der letzten Wirtschaftskrisis auf die industriellen Aktiengesellschaften in Deutschland*. München: J. Schweitzer, 1905.

- No.0115 Hübener, E. *Die deutsche Wirtschaftskrisis von 1873. (T. 1)*. Berlin: E. Ebering, 1905. 併設: 京大ほか
- No.0116 Janovsky, K. *Die Wirtschaftskrise in der Tschechoslowakei*. Reichenberg: Wol-  
len- u. Leinen-Industrie, 1921.
- No.0117 Lahn, J. J. O. *Depressions-Perioden und ihre einheitliche Ursache*. Brooklyn,  
N.Y.: [s.n.], 1903. 併設: 一橋古典Mengarほか
- No.0118 Laveleye, E. de. *Der wahre grund der seit 1873 bis jetzt anhaltenden wirth-  
schaftlichen krisis und das einzige mittel zu ihrer heilung*. Osnabrück: Bernhard  
Wehberg, 1881c.
- No.0119 Müller, Robert. *Die deutsche Weinkrisis unter besonderer Berücksichtigung  
der Verhältnisse im Moselweingebiet*. Osnabrück: Bernhard Wehberg Osnabrück:  
Bernhard Wehberg, 1913.
- No.0120 Neurath, W. *Die wahren Ursachen der Überproduktionskrisen sowie der  
Erwerbs- und Arbeitslosigkeit: Ein Beitrag zur Löung der socialen Frage von  
Wilhelm Neurath*. Wien u. Leipzig: Manz, Klinkhardt, 1892. 併設: 一橋古典Mengar  
ほか
- No.0121 Njemetzki. *Die Überwindung der Getreidebrot-Krisis durch ländliche Bäckerei-  
Genossenschaften*. Berlin: Hofmann, 1901.
- No.0122 Pribram, K. *Die Wirtschaftskrise und die Kreditbeschaffung. Referat gehalten  
bei der III. österreichischen Wohnungskonferenz am 29. November 1913. Separat-Ab-  
druck aus Nr.18 der Schriften der zentralstelle fürWohnungsreform in Oesterreich*.  
1913
- No.0123 Schrempp, F. *Die Ursache der Krisen: eine nationalökonomische Krisentheorie*.  
Köln: DuMont Schauberg, 1904. 併設: 一橋古典Mengarほか
- No.0124 Sombart, W. *Versuch einer Systematik der Wirtschaftskrisen* Tübingen u.  
Leipzig: J.C.B.Mohr, 1904.
- No.0125 Spiethoff, A. *Die Krisenarten*. München u. Leipzig: Duncker & Humblot, 1918.
- No.0126 Ucke, A. *Die agrarkrisis in Preussen whrend der zwanziger jahre dieses  
jahrhunderts*. Halle a. S.: Ehrhardt Karras, 1887. 併設: 一橋古典Mengarほか
- No.0127 Wolf, J. *Die gegenwärtige Wirtschaftskrisis Antrittsrede gehalten an der  
Universität Züich im Sommersemester 1888*. Tübingen: H. Laupp, 1888.
- 64) 『東京商科大学創立50周年記念論文集』同文館, 1925: 480-1.
- 65) 桂木健次「市場経済に関する学史的系譜と環境論の位相」『富大経済論集』49 (3), 2004.:  
117-26.

提出年月日: 2012年11月9日



## 正誤表

268(424) 頁7行

誤) 近郊

正) 均衡

279(435) 頁9行

誤) **basicmone**

正) **basicmoney**

283(439) 頁の最後に以下を加える

尚，上記各位からは文庫関連文献の照合の限りで，本文趣意については執筆者の責にある。